

「ジャパンファウンデーションと日本語教育」～「日本語教育スタンダード」の構築～

学習者の目的や関心が多様化し、世界的な広がりが急速に進んでいます。

◆海外の日本語学習者の数が年間200万人の大台を超えたのは1998年でしたが、2003年には235万人を記録しました。とりわけ若年層における取り組みが活発になるにつれ、また日本の文化的発信に対する評価が高まるにつれ、学習者の関心や目的も多様化し、これまでの指導論や評価論だけでは十分な対応が困難になりつつある、と報告されています。

ところで、ジャパンファウンデーションによるこれまでの日本語教育事業は、各国・地域のニーズに応じて「支援」するという形で行われてきました。それぞれの主体性を尊重し、自立化・現地化を促すためには、それが最も望ましい方法であると考えたからにはほかならず、その結果、実際に日本語教育の基盤が整備されてきた国々があります。しかし一方で、日本語教育の世界的な広がりは、グローバリゼーションの浸透に伴い、私たちの想像以上に急速に進んでいて「もはや従来の方法では立ち行かないほどの勢いである」と認識を新たにしました。

日本語教育にとっては、いまが抜本的な整備の潮時。

◆他方、多文化共生が進み、多言語教育の整備が不可欠となったアメリカやオーストラリア、あるいはヨーロッパなどでは、すでに90年代から言語教育の本格的な体系化や標準化が進められていました。日本における言語環境は、まだそれらの国や地域とは異なりますが、日本語教育のめざましい伸張を見るに、遠か

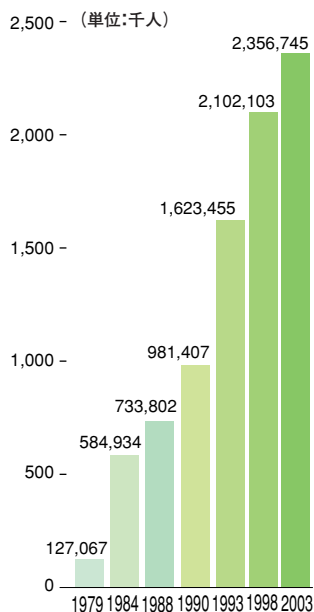
らず日本語使用の場は国際的にさらに広がるでしょう。また国内においても、外国人の受入れが現状以上に進めば、さまざまな日本語使用者が身の回りに増えてくることは必至です。したがって、日本語教育にとっては、いまが抜本的な整備の潮時であると判断しました。それによって、自立化・現地化を「推進」することも可能になると考えます。

では、体系化や標準化とは何を指すのでしょうか。日本語教育に限らず、多くの言語教育では、学習者の言語能力基準の設定や評価は、学習時間数や習得語彙数などを目安に、いわゆる「初級」、「中級」、「上級」に区分されるのが一般的です。しかし、これによって、学習者の実際的なコミュニケーション能力を客観的に測ることはできません。異言語間コミュニケーションは、単に語彙や成句の保有数の多寡によってではなくて、特定の場面や領域において、それぞれの言語が持つ文化的コンテキストや、さまざまな状況・条件の下で、実際にどのような言語行動が遂行できるのかということに、その成否がかかっているからです。それらを体系化し、学習レベルごとの標準とし、それに準拠した評価法やテストによって学習成果を測ることは、その言語教育自体の国際標準化をも図ることにほかなりません。

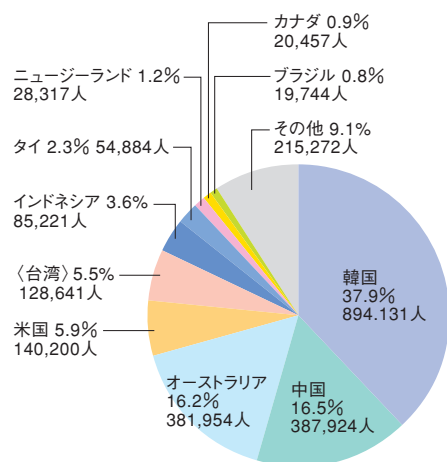
欧米などの標準化・体系化を規範に「日本語スタンダード」の構築に着手。

◆2005年度、私たちは欧米などの先行例に見る「標準化」を範として、数年後の完成を目的に「日本語教育スタンダード(仮称)」の構築に着手しました。これは、同様の整備・導入までに30年余を要したヨーロッパの例からすれば、極めて短期間での達成目標ですが、日本語教育の中核機関として、これまでに33年間の活動を通じて、国内外にさまざまな人材を輩出し、また多くの実績を残しているジャパンファウンデーションにとっては、対応は十分に可能であると自負しています。実績の中には、開始以来21回を数えた「日本語能力試験」も含まれていて、それが「日本語教育スタンダード(仮称)」の言語能力基準の原型となる構造と機能を有していますので、その改定をスタンダードと並行して開始することとしました。この一連の作業は、ジャパンファウンデーションによる各種の日本語事業の改善・推進のみならず、広く国内外の日本語教育の発展をも視野に置いたものであり、国際社会における日本語使用の場を整備するために私たちが担う国際的責務であると自覚しています。

■学習者数



■学習者数の国別構成 (2003年)



日本語能力試験 Proficiency Test

海外44カ国・地域、116都市で、約40万人が受験しました。

◆日本語能力試験は、日本語を母語としない方々を対象に、日本語能力を測定し、認定することを目的として、1984年度より、ジャパンファウンデーションが海外各地の試験実施団体との共催により実施しています（日本国内においては、財団法人日本国際教育支援協会が実施）。

日本語能力試験は、1級（900時間程度の学習レベル）、2級（600時間程度の学習レベル）、3級（300時間程度の学習レベル）、4級（150時間程度の学習レベル）の4つの級に区分されており、受験者は自己の日本語能力に適した級を受験することができます。各級とも「文字・語彙」、「聴解」、「読解・文法」の3類から

構成されています。

2005年度の日本語能力試験は、12月4日の日曜日に全世界一斉に実施されました。22回目となった今回、海外では44の国・地域、116都市において実施され、全体の応募者数は40万人にのぼりました。

2005年度日本語能力試験 地域別受験者数

	受験者数	実施都市
アジア	278,286	63
大洋州	1,271	9
米州	8,165	21
欧州	6,561	21
中東・アフリカ	504	2
国内	61,457	20
合計	356,244	136

日本語教材の開発・制作

日本語教材の開発

「インターネット日本語しけん すしテスト」
<http://momo.jp.f.go.jp/sushi/>

◆ジャパンファウンデーションが海外の日本語入門レベルの年少者を対象としたインターネット上のテストとして独自に開発したもので、2004年3月に公開されました。

ユーザー登録すれば、無料で何度でもテストが受けられます。絵を見たり、音を聞いたりして答えを選ぶなど3つのパート29問を30分以内に答えると、得点に応じて「すし」を握ってもらえます。

日本語だけでなく、英・中・韓・タイ・インドネシア・ポルトガル語版も提供しています。

「みんなの教材サイト」

<http://momiji.jp.f.go.jp/kyozai/>

◆世界各地の日本語教師が自由に利用できる教

材用素材を無料で提供しているサイト。写真・イラストなども数多く掲載され、2002年度の公開以来、毎年素材や機能を拡充しています。2005年度には250万件（ページビュー）を超えるアクセスがありました。

「児童・生徒のための日本語わいわい活動集」

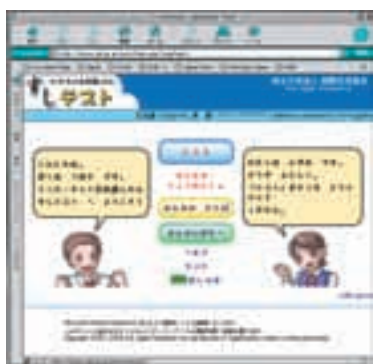
◆児童・生徒が日本語の知識を得るだけでなく、日本語を使って自分を表現したり、相手を理解したりするコミュニケーションの体験ができるような、ゲームを取り入れた活動、聞く、読む、話す、書くなど複数の技能を必要とする活動、実際のコミュニケーションに近い活動などが掲載されており、活動で利用する歌、物語、会話例などの音声CDも付いています。生き生きとした楽しい授業のためにこの活動集をお役立てください。

発行・スリーエーネットワーク

● B5判 275P、ワークシート、CD1枚付き

価格 2,625円（税込）

ISBN 4-88319-357-8



● すしテスト



● みんなの教材サイト



ことばを **開く**

日本語教師の派遣、日本語教育推進のための助成事業

日本語教育指導助手、
シニア客員教授派遣プログラムを新設導入。

◆各国のジャパンファウンデーション事務所、教育省、中・高等教育機関などに日本語教育専門家、ジュニア専門家(旧・青年日本語教師)を派遣。日本語教師研修、カリキュラムや教材開発、教授法・教材制作などの助言や授業を通し、日本語教育の普及・発展に寄与しています。

また、海外の日本語講座の講師給与・謝金や日本語弁論大会への助成、海外

の日本語教育機関による日本語教育関係の会議やセミナー、ワークショップなど、側面支援策としての助成なども行っています。

2005年度派遣からは、日本語教育指導助手、シニア客員教授派遣プログラム(いずれもJFボランティア制度の一環)を新設導入。多様な派遣プログラムを整備することにより、受け手となる海外の日本語教育機関の多彩なニーズに応えるとともに、年齢や経験の異なる日本語教育専門家としての人材を、効果的・効率的に組み合わせて派遣する機会の拡充に対応しています。



中学生から元気をもたらって

日本語教育専門家 来嶋洋美
(英国 ジャパンファウンデーションロンドン事務所)

ヨーロッパの日本語学習者数は、アジア・大洋州ほどには多くありませんが、日本語教育の歴史は長く、今も熱心な学習者と先生方によって支えられています。なかでも英国は、ヨーロッパでは学習者数がいちばん多い国で(2位フランス、3位ドイツ)、近年の特徴としては中等教育の学習者が多いこと(英国の学習者全体の約72%)があげられます。これは世界の日本語教育の動向とも軌を一にするものですが、中等教育における外国語教育に力を入れてきた英国教育技能省の言語政策を反映する結果だと言えます。初等教育においても2010年を目標に外国語科目の導入が計画されていますし、また、外国語能力を一生の財産ととらえ、その能力を認定するための基準「Language Ladder」の開発も発表されています。このような状況の中、3カ月前にロンドン事務所に派遣されてきた私が、二人の同僚講師といっしょに日々どのような仕事をしているか、右にご紹介しましょう。



左:筆者

◎情報収集と状況把握

まず、英国での仕事は、この国における教育事情及び日本語教育の把握から始まります。英国の教育事情は教育制度の一つをとっても、もともと複雑でわかりにくい上に、現在、ダイナミックな言語政策が次々と実施されている最中です。したがって、その情報収集は重要な仕事になります。関係資料を読む、学校を見学する、先生方と交流するなど、様々な手段を講じて、日常的に情報収集を心がけています。

◎教育イベントに参加する

次に、スピーチコンテストや外国語教育関係の学会・研究会など、研究イベントへの参加があります。4月には中等教育の学習者による全国規模のスピーチコンテスト「日本語カップ」が行われました。キーステージ3(中等教育11~14歳)からキーステージ5(中等教育16~18歳)の若い人たちが日ごろの学習成果を披露しましたが、日本語力と同時にスピーチの内容にも人としての成長がはっきりと見られました。人間の成長期にある若い人々に対する日本語教育には、単に言語を教えるだけではない、それ以上の可能性と意義があることを感じさせる大会でした。

◎教材をつくる・授業をする

また、日本語教育用教材作成や日本語授業も行っています。ロンドン日本語センターのニュースレター「まど」の教材記事執筆、中学校への日本語出張授業、日本語教師向け日本語コースの実施などがその具体的内容です。3月下旬に、ロンドンから電車で2、3時間ほどのところにある中学校から「インターナショナル・デイ」での日本語授業5クラス分を依頼され、同僚のロシェル・マシューズ講師と一緒に出張してきました。能力別の5つのクラスで、ICT教材を使ってあいさつや文字を教えました。どのクラスの生徒も反応が良く、日本語にたいへん興味を持ったようでした。

上に紹介したような業務を含む、すべての仕事の土台としていちばん大切なことは、関係者とのより良い人間関係の構築です。というのは、ここロンドン事務所の日本語教育支援は、じつに多くの機関や人々との協力関係の中で、一つ一つの仕事が動いているからです。当地の教育関係者の方々にお会いして、いろいろな話をし、良い人間関係を築くことは、今までに述べた仕事をより円滑に進めていくための必須条件と言えるでしょう。

海外事務所は一般的な日本語教育

機関とは業務内容が異なり、ロンドン事務所には日本語講座も設置されていません。したがって、毎日教室で日本語の授業をするという、教師としての「普通の仕事」はありません。とは言っても、これら仕事は紛れもなく日本語教育の仕事なのです。日本語教育と多面的にかかわる面白さがここにはあるように思われます。

(記事の内容は2005年5月1日現在のもの)

海外から、日本語教師や日本語の知識を必要とする人などを招く。

◆「日本語国際センター」は、日本語学習人口の急増などに伴い、海外各国からの一層の支援や協力の要請に応えるために、1989年7月、ジャパンファウンデーションの附属機関として埼玉県さいたま市に設立されました。

その役割のひとつが、海外の日本語教育機関の日本語教師の育成です。海外の日本語教師を招へいし、

日本語の教授法や日本事情等を学ぶための研修を実施しています。あわせて教材の開発・制作を行っています。

また、1997年5月から、大阪府泉南郡田尻町の「関西国際センター」が事業を開始。職務や研究などのために日本語の知識を必要とする方を対象にした専門日本語研修や、海外の日本語学習者を奨励する日本語学習者訪日研修などを行っています。



◆2005年度、「日本語国際センター」や「関西国際センター」の研修に参加した3名の方々に、その感想を述べていただきました。

日本語教師としてのスキルに、より一層磨きをかけることができました。

闫占胜氏 (イエン・ズァスェン、中国内モンゴル日本語教師)
日本語国際センターにて 2006年2月-3月研修

◆中国中等教育研修生としての52日間の研修は、あつという間に終わりました。振り返ってみると、私にとつて本当に有意義なものでありました。

研修では、日本語や日本語教授法の授業を受けたばかりでなく、ホームステイ、歌舞伎鑑賞、茶道、生け花、着付けなどの体験、研修旅行、中・高校生との交流など、様々なプログラムに参加しました。

私はこの機会を積極的に活用し、日本語を教えるにあたって必要とされる日本に関する背景知識を実際に体験し、日本語の授業に役立つ情報も収集しました。日本語教師としてのスキルにより一層磨きをかけることができました。

今回の研修で、私の感じたことは二つあります。一つは勉強には限りがないということです。人生の一番黄金時代である学生時代は、どんなに幸せなこと、大切な時間なのかと強く感じました。私は今回教師の身分を変えて、再び学生になって、いろいろな知識を身につけ、いろいろな体験ができて、ほんとうにうれいのです。

もう一つ感じたことは自分の愛国心です。母国にいたときに、私は国に愛情を持っているのをあまり感じていませんでしたが、海外に出て、かえって関心百倍になりました。

生徒たちに言いたいのは日本へ行くには、日本語、英語、コンピュータをまじめに勉強しなければならないということです。私は日本語教師として、これからも微力ながら、中日友好交流のために、頑張っていきたいと思ひます。

研修に参加した海外の方々の声 Training

この黄金の日々は心にいつまでも、残ることでしょう。

オウン・チョウ・モー氏 (ミャンマー外務省)
関西国際センターにて 2005年10月-2006年6月研修

◆素晴らしくこまかいところまで行きとどいた準備、体系的なカリキュラム、よく考えられた教材、学生とのやりとりのある素晴らしい教え方、それに、有能だけでなく、親切で我慢強い先生方。日本が短期間で先進国の仲間入りした理由がよくわかります。

実際、研修では日本語だけではなく、社会的・外交的な儀礼も知ることができ、自信も持てました。それは私たちのキャリアや外務省、そしてもちろん母国にとって大変有益なことです。

関西国際センターで一緒に勉強できたのは短いあいだでしたが、この黄金の日々は私たちの心にいつまでも残ることでしょう。どこにいても、どんなに高い役職についても、私たちはいつまでも「センターの若い学生」です。

この研修への深い感謝の気持ちを言葉で表すことはできません。ただ一言、日本語でこ言えるだけです。

「ほんとうにいろいろお世話になりました」



● 関西国際センター



● 日本語国際センター

日本人の他人を敬う気持ち、素朴さと規律正しさに触れました。

マエハラ・リカルド・オサム氏 (ブラジル農務省)
関西国際センターにて 2005年10月-2006年6月研修

◆日本に来たことは前にもありましたが、今回の研修によって、日本や日本人、日本文化をより広く、より深い視点から見られるようになりました。

日本史の講義は、現在の日本の生活や日本人の行動を理解するのに役に立ちます。また、外国人は東京や大阪などの大きな街に住むことが多いですが、今回、小さな町に住んで、ほんとうに日本にいると感ひることができ、日本人との交流の機会もたくさんありました。日本人の他人を敬う気持ち、素朴さと規律正しさを見て、もし機会があれば、私は日本で楽しく過ごしたいと思ひました。

ことばを **開**く